

の存在そのものが正しく認識されているとは言えません。養育上の問題、あるいは性格的な問題が原因と誤解されることが多く、何らかの支援を必要とする障害であるという認識に欠けているのが現状ではないでしょうか。大人になった方の相談を受ける中で感じることは、今までどのような支援が必要であったか、今後自立した社会生活を送ることができるように5年後・10年後の姿を視野に入れ、ライフステージに応じた支援を考えていかなければなりません。年齢が上がるとともに、いじめや問題行動が現れてくると、自己イメージ低下・過小な自己評価の傾向が生じてきます。問題行動のみに注意を向けるのではなく、障害として正しく認識され、二次的な問題を防ぐ、そのような対応・支援が求められてきます。

第2部

『不登校・家庭内暴力・引きこもりからみえてくるもの』

司会者：西田 寿美（あすなる学園長）、指定討論者：斎藤 環氏（爽風会佐々木病院）

<石山 佳秀氏>

NPO 法人 三重にフリースクールを作る会 理事長

不登校で自己否定感が強かった子どもも、フリースクール（三重シュレ）に来ることで驚くほどいきいきと活動している子ども達はたくさんいます。それは無理をせずありのままの自分が出せる安心できる場所であり、受容されることで人との信頼関係や自己肯定感を獲得できる場であるからでしょうか。自己肯定感は子どもの成長の大きなエネルギーになると思います。それは家族も同じで、不登校を個人の問題として特別視するのではなく、家族みんなで一致した関わりを持ち、子どもの成長を心から信じるのが大切なのではないのでしょうか。

<森 憲二氏>

いなべ教育支援センター（員弁ふれあい教室）

現場の教師から適応指導教室（現・教育支援センター）の指導員となり、しばらくは視点の違いから私自身が臨機応変なプログラムや評価が目に見えないことにとまどい、子どもの気持ちを理解する為に不登校の子どもの気持ちに肩入れしたり、学校への不信感がわいたり試行錯誤してきました。今まで楽しくない時間を頑張って耐え抜いてきたことで傷つき、緊張や不安の強い子ども達に安心感を持ってもらい信頼関係を築くには、こちらが注意深く試されたり、相当の時間を要しました。子ども達は保護者や教師、周囲の関わる人を通して社会を見ているように感じます。また、この子達を支える側がこの子達に「させる」のではなく、何が起きているのか「わかろうとする」ことが大事であると感じています。

<志村 浩二>

三重県立小児心療センターあすなる学園 臨床心理室主査

児童相談や子育て支援の公的機関に長年勤務した立場から、関係性の視点から不登校や引きこもりの問題を考えてみました。親子間の境界の不鮮明さが子ども側に感情の育ちや自己感覚の発達を妨げる結果になり、その背景があって対等な人間関係の取りにくさから、撤退としての不登校・引きこもりがあると思うことが多いです。あすなる学園における入院治療とは、健康な退行や大人との信頼関係、小集団の仲間関係を保障して自己感覚を取り戻すなどの発達支援としての意味が大きく、そのことが回復に結びつくのだと考えています。